



## 小学校教員志望学生がなぜ大学で歴史学を学ぶのか —社会専修の世界史関連科目から考える—

教育学部 平 正人



福島県出身。2005年に博士号（文学）取得。2009年10月に文教大学教育学部社会専修に着任し、歴史学や世界史に関連する科目を担当する。専門はフランス革命史と西洋出版史であるが、卒業研究では学生の自主性を尊重し、歴史のさまざまなテーマを指導している。

（たいら まさと）

教育学部社会専修の学生は、その多くが小学校・中学校・高校教員を目指している。中学校（社会）・高校（地歴）の教員採用は狭き門であるが、それでもそれに果敢に挑戦する学生は毎年一定数いる。今回はそうした中学校・高校教員を志望する学生ではなく、小学校教員志望学生がなぜ大学で歴史学を学ぶ必要があるのかを、社会専修の世界史関連科目を例にしながら紹介してみたい。

### 1. 社会専修の世界史関連科目

はじめに、社会専修の世界史関連科目を紹介する。1年次に「世界史概説」「国際関係史」、2年次に「ヨーロッパ社会史」、3年生に「外国史演習」「外国史特別演習」、そして4年次に「卒業研究（外国史）」が開講されている。各学年に世界史関連科目が配置されているが、それらは個々に独立した科目ではなく、歴史学の作法を段階的に修得するために連結している。まず、「世界史概説」では歴史を見る眼を身につけ、「国際関係史」では世界史を主体的に考え、「ヨーロッパ社会史」「外国史演習」「外国史特別演習」（3年次春・秋学期）では卒業論文の準備をはじめ、最後に「卒業研究（外国史）」では3年間で身につけた歴史学の作法にもとづき卒業論文を執筆する。社会専修の世界史関連科目は、4年間を通じて世界史を総合的に学習するカリキュラムとなっている。では、それぞれの科目をもう少し具

体的に説明していきたい。

「世界史概説」は高校の教科書を利用して、世界史の基本知識を再確認することからはじめていく。ただし、教科書に基づく復習は受験勉強の繰り返しにすぎない。そこで講義を3分割して、(1) 毎回取りあげる世界史のテーマについて教科書の内容を確認する、(2) 同じテーマを専門とする歴史家の研究書を紹介する、(3) 教科書と研究書の比較を通じてそれらのあいだに解釈のズレが生じていることを理解し、そうしたズレがなぜ生まれるのかを考察する。歴史家は史資料にもとづいて歴史を再構築する。新史料の発見、歴史家の問題意識の変化、多様な分析アプローチの登場、そして科学技術の発展など、歴史家と史資料の関係は時代の流れとともに変化し、それによって歴史家の解釈も刷新されていく。大学で世界史を学ぶうえでの大前提を理解することがこの科目の最大の目的となる。

「国際関係史」では、グループ報告を通じて歴史を考える機会が与えられる。各グループは報告する世界史のテーマについて、「なぜそれをいま問い直す必要があるのか」（現代的意義）を検討することからはじめ、つづいて、そのテーマに関する先行研究を整理・批判したうえで、自分たちの分析視点を提示する。その後、分析に必要な史資料を探し、それらの実証的な分析から導き出した結論をPCやAV機器などを利用して発表する。この科目では、学生がグループ報告を通じて世界史を主体的に考えることがもっとも重要となる。

「ヨーロッパ社会史」「外国史演習」「外国史特別演習」「卒業研究」では、卒業論文の執筆にむけて学生一人ひとりが歴史学の作法を主体的に実践する。3年生は、卒業論文のテーマを明確にすることからはじめ、先行研究を網羅的に収集し、それらを徹底的に批判したうえで、自分の問題設定を確立する。4年生は、分析に必要な史資料を探しもとめ、それらの分析を進めながら、卒業論文の構成を入念に練り上げる。分析の結果は報告会を通じてひろく公開し、そこで得られた批判や新たな知見にもとづきながら、卒業論文を完成させる。完成した論文は卒業論文集にまとめられて毎年発行されている。



「卒業研究（外国史）」が毎年発行している卒業論文集『史宴』

このように学生は限られた時間のなかでこれらの作業を着実に遂行するためのセルフマネジメント能力はもちろんのこと、自分の考えを論理的かつ具体的に整理・表現・伝達する能力、他人と議論するなかで相手の考えを尊重しながらも的確に批判する能力が求められる。これはいわば自分との闘いであり、主観的な解釈・結論に陥ることなく、自分の見解・分析に責任をもち、それに客観性を付与するための最大限の努力を費やさなければならない。

## 2. 歴史学の作法と小学校教員

世界史関連科目を通じて学生に理解してもらいたいのが「歴史は刷新されていく」ということであり、大学で学ぶ歴史学の意義もその点に求められる。歴史学は「史実」を確証する学問である。ただし「史実」とは、歴史のなかに純然たる真実として存在するものではなく、歴史家の解釈が加えられてはじめて現出する歴史的現実にはほかならない。歴史家は自分の生きる時代や社会から、自覚的であれ、無自覚的であれ、少なからぬ影響を受けているため、歴史家の問題意識やそれにともなう歴史解釈は常に変化する。しかしだからといって、歴史家は勝手に歴史を誇張・歪曲しているかというところではない。歴史家は「史実」を究明するために、あらゆる史資料を探求・分析し、あらゆる解釈の可能性を検証すると同時に、非科学的で復元不可能な解釈は徹底的に排除する。この知的営みが歴史的現実に関与性を付与することで、それは「史実」として成立する。大学で学ぶ歴史学は、歴史の真実を発見することではなく、歴史家によって「史実」（＝歴史的現実）がどのように再構築されていくのか、その生成過程を紐解くことが重要なのである。

では、小学校教員志望学生はなぜ大学で歴史学を学ぶ必要があるのか。教員は学校のなかだけで決して生きていくわけではなく、ひとりの自立した社会人として現代社会を生き、時としてその荒波にのみ込まれながら、さまざまな現実と直面し、それらに柔軟に対応しなければならない。時の流れに身を任せているだけでは、現実を前にして右往左往し、自分の行動に確信すらもてないであろう。現代社会で生きる人間に求められるのは、現実から一定の距離を保ち、それを多様な視点から俯瞰し、なにが問題なのかを深く考え、それを客観的に検証するために必要な知識・情報を収集・整理したうえで、現実に加えられているさまざまな意味を冷静に判断する能力なのではないか。これは大学で修得する歴史学の作法にほかならない。こうした能力こそが大学時代に修得すべき教養であり、小学校教員志望学生にも求められる人間力なのである。